

日本ウィリアム・フォークナー協会第 27 回全国大会

研究発表・シンポジウム要旨

【研究発表】

1. *Light in August* における様々な「視線」

楠元 淳平（京都大学博士課程）

司会 塚田 幸光（関西学院大学）

William Faulkner の *Light in August* においては、「視線」が重要な役割を演じている。ここでいう「視線」とは、個人と個人のあいだで交わされるものにとどまらない。神や共同体が個人に向ける「視線」、また個人が自己自身に対して向ける「視線」もここにふくまれる。本発表では、*Light in August* において描かれるこれら三つの視線——〈対の視線〉〈共同的・超越的な視線〉〈内的視線〉——のありようを考察する。個人と個人のあいだで〈対の視線〉が交わされるとき、多くの場合、両者の関係性に決定的な変化をもたらされる。例えばバイロン・バンチが恋に落ちるのは、リーナ・グローブに「一目ぼれ」することによってである。リーナの「視線」は、それまで地味な仕事に明け暮れる禁欲的な生活を送ってきたバイロンを、恋という罪へと誘惑する。リーナとの会話中、彼女を直視することができないバイロンの「視線」は、自らの欲望を抑圧している彼の無意識をよく物語っている。また、ジョー・クリスマスとジョアナ・バーデンの恋愛関係も、台所に忍び込んだジョーをジョアナが発見し、両者がつかのま見つめ合うことから始まる。恋愛関係が続いているあいだ、ジョーはジョアナの「視線」を恐れながらも、どうしてもそこから逃れることができない。〈共同的・超越的な視線〉は、個人を共同体や宗教のイデオロギーに照らして判断する視線である。この〈共同的・超越的な視線〉は、しばしばひとりの個人のなかに内面化されてあらわれる。〈共同的・超越的な視線〉にさらされた個人は、その個性的な人格を失い、「黒人」や「女」といったステレオタイプに分類されるか、あるいは神によってあやつられる単なる「駒」として表象される。個人が自己自身に対して向ける〈内的視線〉は、〈対の視線〉と〈共同的・超越的な視線〉を痛烈に意識した個人が、それらに抗うかたちで自己を規定しようとするときに生じる視線である。ジョー、バイロン、ハイタワーはそれぞれ、共同体や他者との関係において大きな挫折を体験するが、その挫折を通して、彼らは自己のアイデンティティを問い直す〈内的視線〉を獲得する。

2. 新しい女性——『館』のリンダ・スノープス・コール——

菅沼 幸子（同志社女子大学博士課程）

司会 塚田 幸光（関西学院大学）

フォークナーは、いわゆる「南部の淑女」ではない三人の女性を描いている。まず、テンプル・ドレイク。『サンクチュアリ』（1931）で、セクシュアリティを前面に出す衝撃的な女性として描かれるが、『尼僧への鎮魂歌』（1951）では、過去の桎梏と将来の閉塞感に苛まれて苦しむ。次には、ジョアナ・バーデン。『八月の光』（1932）で、ジョー・クリスマスと関係を持ち、セクシュアリティを自在に表現する。その一方で、自分の考えに固執し、他人、つまりクリスマスの行動変容を求めたことが、彼女を死へと向かわせる。

一方、『館』（1959）におけるリンダ・スノープス・コールは、これら二人とは明らかに違う。彼女は、彼女自身が柔軟に変容していくことをいとわない。ニューヨークへ移動し、ユダヤ人を夫とし、スペイン内戦に夫と共に従軍するなど、彼女自身がグローバル化している。第二次世界大戦にもリベット工として関わる。リンダは、出所すれば父親フレム・スノープスを殺す事が明らかであるミンク・スノープスを刑務所から出られるように計らう。彼女は殺人幫助をしてでも、ミンクを利用して自分の目的を成就する。その後、古い体制を代表するギャヴィンと別れ、高級車ジャガーを自分で運転し、ジェファーソンを後にする。

彼女たちは、フォークナーの世界では特別な存在だと言える。つまり、閉鎖的な田舎町ジェファーソンでの、女性を抑圧する父権的な社会習慣と思考体系の中で、世間の思惑など意に介さない強さを見せる女性達である。それでも、その強さには段階がある。これら3人の女性たちを比較し、とりわけリンダの強さを検証してみたい。

フォークナーにはリベラルな側面があるが、作者が世界各地を見聞した後に執筆されたことや、南部社会が変革をしている時代の波が、1959年のリンダの人物造形に影響していると考えられる。

3. “Dry September”における比喩表現によってもたらされる作品の意味をめぐって

加藤 良浩（東北公益文科大学）

司会 早瀬博範（宮崎国際大学）

フォークナーの代表的短編の一つである“Dry September”では、白人の中年女性にレイプされたと噂を立てられた無実の黒人ウィル・メイズが、マクレンドン率いる白人の暴徒たちによってリンチにかけられる物語が描かれている。“Dry September”では、「南部の地域の社会的状況や、暴徒たちの心理と人種問題を追及し説明しようとする、独自ですぐれた描写がなされている」とワゴナーが述べているように、この作品では、アメリカ南部の小さな町を舞台として、究極的な暴力に向かう暴徒たちの心理と黒人差別の特徴を鮮やかに描き出していると言える。

こうした鮮やかな描写は、巧みな比喩や象徴的表現が繰り返し用いられていることと関わっていると考えられるが、本発表では、それらの比喩的、象徴的表現が登場人物や舞台となる町の特徴にどのような意味を与えるのかについて考察することにした。併せて、作品の最後の場面で描かれる彼の自宅の比喩描写と *Light in August* の登場人物パーシー・グリムの人物描写において描かれる類似点について検討し、それが“moon”の比喩描写とどのような関係を持ちうるのかについて考察してみたい。

また、「人種差別を助長するような噂が地域社会によって公然と容認されている」とマシューが指摘しているように、リンチを行う暴徒たちの行為は、南部の町という共同体の中で何ら抵抗を受けないどころかむしろその場所に貢献するかのよう印象を受けるが、それはやはり、その共同体で形成されてきた歴史的文化的影響が少なからず作用していることが原因しているにちがいない。このことに着目し、本発表では、再建期以来の南部の歴史的文化的背景を概観の上検討し、それが上述した作品の比喩的描写にどのような影響を及ぼしているのかについても考察してみることにしたい。

【シンポジウム】

「女が語る南部の歴史」

1984年に出版された *The History of Southern Literature* の序文には、「文学は移りゆく時間と場所に対してその関係性も変化してゆく歴史的展開の見地から眺めること」が有効であり、「アメリカ文学はリージョナルな起源において考察すること」が重要であると記されている。そして、なぜ作家や作品の「南部性」を重視しなくてはいけないのかという問いに対しては、この書の編者や執筆者たちは「Southern identity は重要である。なぜならそれは確かに存在するのだから」と答えるだろうと述べている。南部文学研究の泰斗 Louis D. Rubin Jr. によるこの発言は、その後、Carol S. Manning (*Female Tradition in Southern Literature* [1993]) や Michael Kreyling (*Inventing Southern Literature* [1998]) や Barbara Ladd (*Resisting History* [2007]) をはじめ、さまざまな見地から脈々と問い直され、検証され、今日のグローバル・サウスとも連帯する「新南部研究」に至っている。

「南部」が「創作されたもの」であり「記号」であるということは、「南部文学」が存在しなかったということではなく、「南部」がいかに文学的に存続してきたかということでもあろう。Richard Gray は1986年出版の *Writing the South* を1997年に再版した際に新たに書き加えた後書きの中で、「南部が言語によって創造されてきた歴史は、その書かれた言葉の中に確実にある」、そして「言語や語りは、我々に歴史の中にとどまるための、そこから出てゆくための、すべての機会を与えてくれる」と語っている。

本シンポジウムでは、大文字の歴史から排除され、「モニュメンタルな歴史の意識」を持っていない (Richard King, *A Southern Renaissance* [1980]) とかつて言われていた女たちが語る「南部の歴史」に、今一度耳を傾けることで「南部文学」を再考する機会を提供したい。

“Miss Rosa”の憤怒は誰のもの？

—— 貧困をなんとか生き抜いていく女性たちの エクリチュール 記録

藤平 育子（中央大学元教授）

Absalom, Absalom! の冒頭で、屍棺のような暗く埃っぽい部屋で、語り手ローザは、若きクエンティン・コンプトンを聞き手に選び、サトペンは「紳士ではありませんでした」という訴えを繰り返す。43年間、サトペンへの憤怒のうちに生きてきたローザは、サトペンは「何者だったのか？」を追及するうち、次第に「南部とは何か？」という問いに行きつく。

南部出身の研究者、Patricia Yeager は、1930年から1990年までの南部女性文学を再構築する試み（*Dirt and Desire* [2000]）において、「私はクエンティン・コンプトンのように、揺曳する南部への情熱を拒絶することができずにいる」(1)と告白しつつ、「ハチドリが さえず 囀る南部の向こう側」へ、「フォークナーの蔭の向こう側」(116)に脱出して南部小説を読み直してみようと提案する —— “What is missing from Faulkner’s epic fiction but present in writers such as Alice Walker or Eudora Welty is a sense of the ways race functions in the nonepic everyday.” (Yeager, Prologue, xv.)。

果たして、フォークナー小説には、非叙事詩的な日常の営みが欠落しているのか？ 『アブサロム』におけるサトペン一家の人種的悲劇と近親相姦の危機の背後には、南北戦争時とそれ以後の貧困と飢餓を生き抜く女性たちの日常がローザによって詳細に語られている。本稿では、ミシェル・ド・セルトーが、押しつけられた秩序に抗う無名の人びとの戦術に注目した『日常実践のポイエティーク』（フランス語原典[1980]、山田登世子訳 [1987]）に導かれて、ローザの声が語る女性たちの日常実践を読み解き、ミスター・コンプトンやクエンティンなどの語り手たちが想像しつつ創造する女性の身体表象を通して、南部の歴史の深部に分け入る試みである。

ユードーラ・ウェルティの『泥棒花婿』にみる歴史意識

—— “...this is not a *historical historical novel*.” ——

中 良子（京都産業大学）

ユードーラ・ウェルティの第2冊目の中編小説『泥棒花婿』（1941）は、グリム童話と同名のタイトルがつけられ、おとぎ話のスタイルで書かれた異色作であるが、「南部作家」としてのウェルティの原点を探る上で重要な作品である。

1930年代にWPAの仕事でミシシッピ各地を巡って取材し、写真を撮りながら、短編小説を書きためていた修作時代、ウェルティはナチェズを訪れ、その土地のもつ魅力に惹きつけられて創作のインスピレーションを得たという。「ナチェズ街道にまつわる物語のネックレス」を作りたいという作家の熱意は、エージェントや編集者の賛同を得て「ミシシッピ・ブック」と名付けられたプロジェクトとなり、『泥棒花婿』とそれに続いて出版された短編集『広い網』（1942）となって結実した。南部作家であることを自覚したウェルティの本格的なデビューである。

その「ネックレスの要」となる『泥棒花婿』は、18世紀末、ミシシッピが準州になる直前のスペイン支配下にあったナチェズの開拓地を舞台に、インディアンや歴史上の伝説的人物——ミシシッピ川の船乗りマイク・フィンクやナチェズ街道の盗賊ハープ兄弟も登場させ、様々なおとぎ話の要素を取り入れて描かれるプラントナーの家族の物語である。

ウェルティが後に「私の歴史小説」と呼んだこの作品は、実際、多くの歴史的文献に基づいて構想された。しかしそれを「いわゆる歴史的な歴史小説」として完成させるのではなく、子どもの頃から愛読してきたグリム童話や神話や伝説の要素を盛り込み、おとぎ話のスタイルで書き上げたのはなぜだろうか。南部がもっとも貧しく「南部的」であった時代に、「南部」になる以前の歴史をヨーロッパのおとぎ話に接合させた想像力に、南部をとらえる作家の視点を探ってみたい。

愛と憎しみの距離と Sethe の啓示の可能性

山辺 省太 (同志社大学)

本発表の前半はテネシー・ウィリアムズの『地獄のオルフェウス』を端緒として、『ビラビッド』において描かれる愛と憎しみの近しさについて論じる。たとえば、セサとビラビッドなど、キャラクター間の距離については十分論じられている感があるが、愛と憎しみという相反する感情が混在したときの危険性について、主要人物のセサの言動をとおして分析する。愛憎と聞けば、一般的には愛を基盤にした憎しみを連想することが多いように思うが、セサのビラビッドへの愛は奴隷制という毒をベースに構築されたという仮説をまずは措定する。この作品の魅力は狂気ともいえるセサの愛であり、奴隷制がどのように黒人女性の母の愛に毒を塗っていったかを見ていくことにする。その分析の補助線として、奴隷制という南部の歴史的宿怨をキリスト教的な愛とロマンティック・アイロニーを介して浄化することを試みたアイザック・マッキヤスリンとは対照的に、愛と憎しみの距離が近すぎたセサにはそれができなかったことも、併せて比較検討していく。最終的にセサが僅かながらも奴隷制の毒から解放されたのは、彼女がポール D に語った母親の独占的な愛、つまり子どもに対する所有権を捨て去ったことにあることを、アポカリプスとは対照的な意味合いを持つ神秘主義——語源的に、ヴェールと関係がある——の思想を引きながら論証するのが本発表の全体図である。

“I dont hate it,” とは言わずして

——イマニ・ペリー著 *South to America* からみるアフリカン・アメリカン・スカラー回顧録

深瀬 有希子（実践女子大学）

アフリカ系アメリカ人女性批評家 Imani Perry (1972-)による *South to America: A Journey Below the Mason-Dixon to Understand the Soul of a Nation* (2022)は、作家のキャリアの後期が始まるともいわれる歳に出版された回顧録である。アラバマ州バーミングハムの出身であるペリーは、小学生の時点でマサチューツ州ケンブリッジに転居し、その後は東部の大学で学び、現在はハーヴァード大学にて教鞭をとる。彼女はあるインタビューで、かつての指導教官ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアからの学恩を語っているが、師であるゲイツ自身もウェスト・ヴァージニア州ピードモントでの幼少期を語る *Colored People: A Memoir* (1994)を出版している。またペリー自身は直接的には言及しないものの、回顧録というジャンルで、かつフォークナーとアフリカ系アメリカ文学との関りでいえば、ヒューストン・ベイカー・ジュニアの *I Don't Hate the South: Reflections on Faulkner, Family, and the South* (2007)を思い起こさずにはいられない。ベイカーは、ハワード大学時代に、同級生ストークリー・カーマイケルとともにフォークナー作品に出会った様子をふりかえる。彼らにフォークナー作品を教えたのは、当大学教員のトニ・モリスンであった。もっともこうしたアフリカ系アメリカ人批評家による回顧録や自伝たとえば、W. E. B. DuBois の *Darkwater: Voices from Within the Veil* (1920) なども挙げなくてはいけないであろう。本発表では、ペリーが描くミシシッピー、アラバマ、ルイジアナなどでの経験を読みながら、1950年代半ばにはフォークナーと直接対峙しようとしたデュボイスが提唱した“The Souls of Black Folk”が、ペリーの“The Soul of a Nation”へとどのように展開されているかを考えてみたい。